平成28年10月11日
ｵﾘﾝﾋﾟｯｸ･ﾊﾟﾗﾘﾝﾋﾟｯｸ等
推進対策特別委員会

リオデジャネイロ 2016
オリンピック・パラリンピック競技大会
視察報告

平成２８年１０月

オリンピック・パラリンピック準備局

本視察結果は、IOC、IPC、リオ組織委員会が実施するオブザーバープログラムや、リオ市などの大会関係者から聴取した内容に基づき整理したものです。

目　次

1 輸送 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

2 ボランティア ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

3 セキュリティ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

4 持続可能性 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

5 飲食の提供 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

6 標識・サイン ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

7 シティドレッシング ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

8 ライブサイト ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

9 ハード面のバリアフリー ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17

10 ソフト面のバリアフリー ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

11 市民を巻き込む取組 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

12 大会を支える都市運営 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23

1　輸送

オリンピック・パラリンピック大会を成功させるためには、選手や審判などの大会関係者を安全・確実に輸送するとともに、多くの観客を円滑に輸送、誘導する必要がある。また、こうした大会に係る輸送と都民生活・都市活動との両立が、開催都市として強く求められる。

このため、近年の大会においては、大会関係車両専用の車線であるオリンピックレーンを設置することや、一般交通を対象とした交通需要マネジメントを実施することが通例となっている。

リオ大会における状況

（１）インフラ整備

○　オリンピックに合わせて、地下鉄（1 路線）、高速道路（1 路線）、BRT（3 路線）を整備。上記のうち、地下鉄 4 号線、トランスオリンピカ線（BRT&道路）は大会直前に完成し、観客や大会関係車両専用に使用

○　オリンピックパーク観客用の大規模歩道橋や、パラリンピック時の選手用バス発着場など一部の大会時の需要に対しては仮設にて対応

【新設された地下鉄 4 号線】

【選手用バス乗り場
（パラリンピック大会時）】

（２）大会関係者輸送

○　オリンピック時は、主要道路（片側 3～7 車線）にオリンピックレーンを 1～2 車線設置。運用主体はリオ市。大会関係車両の確実な運行に大きく貢献。一方、レーン設置道路及びその周辺で渋滞が発生

○　オリンピックレーンの運用は①専用レーン、②優先レーン（大会関係者以外に路線バス等も利用）、③シェアレーンの 3 種類

○　違反罰金は 128 レアル（約 4 千円※）。※【1 レアル=31 円。平成 28 年 9 月末時点】

○　バス及びフリート用車両基地をオリンピックパーク、選手村周辺に 4 か所（延べ面積：約 23ha）設置

【オリンピックレーン設置状況】

【バス車両基地状況】

（３）観客・スタッフ輸送

○　観客及びスタッフは全て公共交通機関を利用。観客用の駐車場は設置せず。

○　リオは立候補ファイルに、観客の公共交通利用無料化を記載していたが実施せず。代替策として、一定期間公共交通が乗り放題となるトランスポートカードを有償で提供（1 日 25 レアル（約 800 円））。実施主体はリオ市

○　道路や鉄道などのバリアフリー化については、大会に合わせ、会場周辺駅等でエレベータの新設など対策を実施

【オリンピックスタジアム最寄駅に新設されたエレベータ】

（４）輸送センター

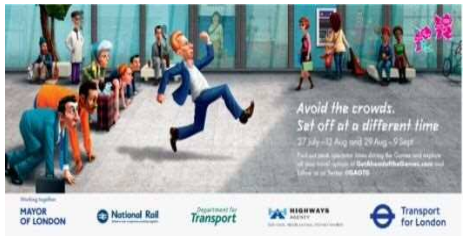
○　リオ市は 2010 年の水害を契機に設置された都市オペレーションセンター内に輸送部門を設置し、オリンピックレーン等に関する調整を実施。リオ組織委員会は輸送調整センター、バス／フリートオペレーションセンターを車両基地内等に設置し、車両運営等を実施。リオ市と組織委員会は双方に職員を派遣し、情報を共有

（５）交通需要マネジメント

○　学校の長期休暇の時期の変更（7 月→8 月）、大会期間周辺の 4 日間の休日化（①開会式前日、②開会式、③トライアスロン開催日、④閉会式）をリオ市長の権限で実施。休日設定日は渋滞が減少

【参考：ロンドン大会の状況】

ロンドン大会では、交通需要マネジメントの一環として、大会の 2 年前から企業等への混雑情報の提供、対策支援を開始。1 年前からは一般利用者に向けて大規模な広報・情報提供を実施。大会時の混雑低減に成功



【いつもと違う時間の出発を奨励するポスター】

２ ボランティア

オリンピック・パラリンピック競技大会時には、世界各国・地域からの選手をはじめとする大会関係者はもとより、国内外からの旅行者も多数、開催都市を訪れる。

こうした国内外からの旅行者に対する、空港・主要駅、観光地などにおける観光・交通案内、最寄駅から競技会場までの観客誘導、競技会場、選手村などの大会関係施設における大会運営を支えるボランティアを募集・育成・運用していく必要がある。

リオ大会における状況

（１）概要

○　組織委員会

大会ボランティア約 56,000 人（オリンピック：37,000 人、パラリンピック：19,000 人）

競技会場、選手村、メインプレスセンター、大会関係者ホテル等の大会関連施設において、大会運営をサポート

募集開始：2014 年 8 月

研修開始：2016 年 3 月

○　リオ市

シティ・ホスト（有償スタッフ）約 1,700 人

空港、地下鉄・BRT 駅、観光地に設置したブース等における観光・交通案内、最寄駅から会場まで（ラストマイル）における観客誘導

募集開始：2015 年 3 月（最終募集 2016 年 5 月）

研修開始：2016 年 5 月（大会 10 日～15 日前からブースにおける OJT 実施）

（２）参考となる取組

ア　観光・交通案内

○　シティ・ホストがブースにおいて、大会情報のガイドブック、マップ、観光情報（多言語対応（英語・ポルトガル語・スペイン語））などを活用し、案内を行っていた。

また、観光、レストラン情報などのアプリを開発し、配布物等において紹介している。

【案内ブース】

【各種配布物】

【大会期間中の取組】

○　交通拠点や観光スポット等の他、オリンピックパーク内、選手村、メインプレスセンター等の大会関連施設内にもブース等を設置し、大会関係者に観光・交通案内を行っていた。

【オリンピックパーク内】

【選手村ビレッジプラザ内】

イ　ユニフォーム

○　競技会場等の内外でスタッフのユニフォームデザイン等は若干異なるものの統一感・一体感はあった。(組織委員会のユニフォームは左胸にエンブレム、リオ市のユニフォームは左胸に市のマーク）組織委員会のスポンサーから提供されていた。

【大会ボランティア】

【シティ・ホスト】

ウ　ラストマイル（最寄駅から会場まで）の観客誘導

○　ラストマイルにおいて、シティ・ホストが大きな指型のボードやメガホンを使用し、観客誘導を行うとともに、ダンスを踊るなど、観客を楽しませる工夫も凝らしていた。

○　大会開始当初、組織委員会とリオ市は、十分に連携が取れておらず、場所によってシティ・ホストの過不足が生じていた。

○　その後、都市オペレーションセンターにシティ・ホストの各クラスターマネージャーを配置し、交通状況、観客動向などをモニターで確認し、適宜、現場に指示を出し、スタッフの配置場所・人数を柔軟に調整した。

○　休憩場所（飲食スペース)、トイレ、荷物（バックパック）置場等、会場内外（大会ボランティアとシティ・ホスト）の待遇が異なっていた。

エ　募集・育成

○　リオでは､ボランティア文化が定着していないことから､ボランティアが集まらず、大会直前まで募集を行っていたため、十分な研修が行えなかった。

【参考：ロンドン大会の状況】

○　組織委員会

約 70,000 人の大会ボランティア（ゲームズメーカー）が競技会場、選手村、メインプレスセンター、大会関係者ホテル等の大会関連施設において、大会運営をサポート

2010 年 9 月～募集開始、2012 年 2 月～研修開始

○　ロンドン市

約 8,000 人の都市ボランティア（ロンドンアンバサダー）が空港、主要駅、観光地において、観光・交通案内を実施（※ラストマイルは組織委員会が担当）

2011 年 1 月～募集開始、2012 年 1 月～研修開始

３ セキュリティ

オリンピック・パラリンピック競技大会期間中において、大会に訪れる全ての人の安全・安心を確保することは、開催都市の責務である。

このため、開催都市としては、事前対策（リスク・マネジメント）により、大会に訪れた人が危険なことに遭わず、不安を感じないように、その要因となるリスクを低減する、あるいは回避措置を行わなければならない。

リオ大会における状況

（１）概要

○　オリンピック競技大会の期間中、警察（連邦、州、市）が約 3 万人、各州警察等特別派遣部隊（国家治安部隊）が約 6,500 人、軍が約 3 万 8,000 人、退職警察官など民間警備員約 3,500 人など、合計約 8 万 5,000 人の警備体制を構築

○　主に、競技会場の警備を国家治安部隊及び民間警備員、競技会場周辺、街頭の警戒を州軍警察及び市警察、要人警護を連邦警察、空域、海域等の警戒を軍が担当

（２）競技会場

○　バッハ地区所在のオリンピック・パークをはじめとする各地区の会場内警備は、赤色ベレー帽、迷彩服の国家治安部隊が警戒

○　組織委員会が予定の自主警備要員を確保できず、連邦政府が大会の直前に入場検査要員として退職警察官を配備

○　競技会場等のペリメータ・フェンスのなかには、足場が固定されていないものや、配線がむき出しになっているものもあり、警戒上の留意事項として確認

【会場内の警備状況】

【会場内仮設フェンス等】

（３）競技会場周辺（ラストマイル）

○　閉会式会場の「マラカナン・スタジアム」最寄駅の地下鉄「マラカナン駅」及びその周辺では、交通事業者の警備員と、州軍警察が警戒

○　ラストマイルには、組織委員会のボランティアや、シティ・ホスト（リオ市のボランティア）が会場案内を行い、州軍警察、軍が警戒

【競技会場周辺警戒状況】

【ラストマイル入口付近警戒状況】

○　会場の最寄駅となる地下鉄「マラカナン駅」から閉会式の会場「マラカナン・スタジアム」までのラストマイルでは、人道橋に設置された階段が、急こう配であるなど危険個所が存在し、群衆管理上の留意事項として確認

【ラストマイル人道橋】

（４）街中

○　リオ市では、リオ州、リオ市、リオ商業連盟などが共同して治安維持のためのパトロール・システムを構築し、各地区でプロジェクトを運用した。

○　リオ市セントロ地区では、プロジェクト「セントロ・プレゼンチ」から装備品の提供を受け、非番の州軍警察官などが、警備員として付近パトロールを実施

【セントロ・プレゼンチ】

○　リオ市内の所々には、市民の規範意識の低下を誘発する廃屋や落書きが放置され旅行者に不安を与える一因となっていた。

○　ジカウィルス感染症への対策は、建物内の冷房強化や消毒などを行ったが、事前に適切な情報が十分に伝わらず、アスリートをはじめ、関係者、旅行者などに不安を与える要因となった。

【参考：ロンドン大会の状況】
（セキュリティについて）
・ロンドン大会において、会場及びラストマイルでの警戒は、組織委員会が担う予定であったが、大会前に予定していた警備員を確保することができず、治安維持機関である警察や軍が協力することになった。
・街中では、警察による警戒のほか、テロなどに備えて軍が警戒した。

４ 持続可能性

近年、ＩＯＣでは持続可能な大会の必要性を強く打ち出しており、大会開催の主要なテーマに掲げている。2014 年にはオリンピック アジェンダ 2020 がＩＯＣから示されており、その中においても、「オリンピック競技大会のすべての側面に持続可能性を導入する」などの提言が盛り込まれている。

リオ大会における状況

（１）オリンピックパーク整備の考え方

○ オリンピックパークの整備について、招致ファイル作成段階で、レガシーを意識した今回案を選定

⇒ 大会後のレガシーとして、施設が残るだけでなく、インフラ整備や自然環境の回復を実現させ、地域の発展に寄与する計画としている。

・コスト縮減のため、PPP（パブリック・プライベート・パートナーシップ）により整備を実施（本体だけでなくインフラ整備も含む。）

・大会後は、オリンピックパークの 40%が新たな PPP による不動産開発、30%が公園利用、30%がオリンピックトレーニングセンターに供される予定

・荒廃していた南側に隣接するハカレパグア湖岸周辺において、マングローブ等により 7.3ha の自然植生を復元

【オリンピックパークの施設配置状況】

*上記は「Pre-Games Integrated Reports Rio 2016(2016 年 7 月 Rio2016)」P.49 を元に作成

（２）大会後の施設の有効利用

○　新設したベロドローム、カリオカアリーナは、自然採光を取り入れるため屋根部分の改修等を行い、オリンピックセンター、多目的ホール、公立学校として利用

○　仮設であるアクアティクスセンター、フューチャーアリーナについては、「Nomadic Architecture」というコンセプトにより計画

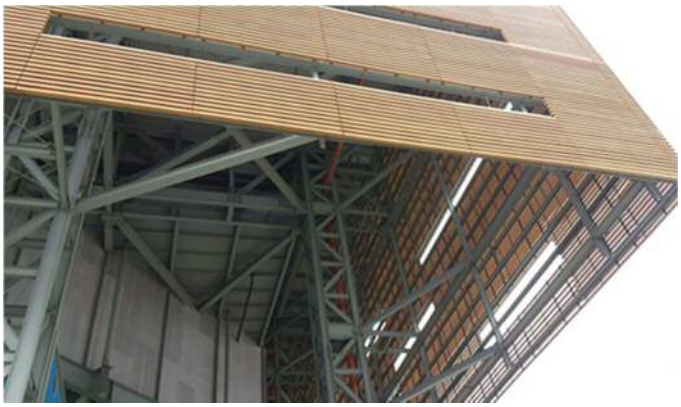
・建築に使用されている柱、梁等の部材や、エレベータ、トイレ等を解体後に再利用することを前提に整備

・例えば再利用にあたり、解体を容易にするため、溶接しない、ネジ山を探しやすくする等の仕上げに工夫

・再利用先

アクアティクスセンター→2 か所のプール整備に再利用
（5 千人及び 4 千人収容規模）

フューチャーアリーナ→4 つの学校整備に再利用



【フューチャーアリーナ】

【参考：ロンドン大会の状況】
（施設の再利用について）

・主会場となったオリンピックパークは、ロンドンレガシー開発公社により、大会後にクイーンエリザベスオリンピックパークとして再整備され、スポーツ施設のほか、選手村の住宅への改築や学校を新設するなどロンドン東部地域の再生に寄与

・例えば、新設したアクアティクスセンターは、大会時に建物の両翼となっていた仮設客席を撤去し、17,500 席から 2,500 席に縮小。ホッケーセンターはパーク内で移設

５ 飲食の提供

オリンピック・パラリンピック競技大会において、大会組織委員会は、必要な食材調達のための基準を定め、大会関連施設において、選手・観客等に対し、持続可能性にも配慮しながら、新鮮でバランスがとれた、十分な量と種類の飲食を提供しなければならない。

また、2020 年大会を契機に和食文化をはじめとした日本の文化・魅力を発信することも重要であり、都は国・組織委員会とともに、選手村等での日本食の提供や提供される食事における国産食材の活用に向けた検討を行っている。

リオ大会における状況

（１）概要

○　選手村、メディアセンター、競技会場などにおいて、各国の選手など大会関係者や報道関係者、観客等に対し 1,400 万食以上を提供する計画のもと取組を実施

（２）食材の調達基準

○　①リオ州、②ブラジル国内、③南米、④その他海外 の優先順位に従ってサプライヤーより食品を確保

○　地域経済の成長促進と農業従事者への経済的支援提供のため、主に国内の中小規模の生産者から調達

○　ブラジルのオーガニック基準による認証を受けたオーガニック食材の確保を優先

○　環境等に関する国際的認証（フェアトレード、MSC 等）を受けた食材確保を優先

（３）ブラジルの料理・食材提供等の取組

○　選手村メインダイニング内にブラジル料理コーナーを設置し、各種料理のうち一定のメニューをブラジル料理として提供（ブラジル産食材の活用状況や産地に関する表示はない。）

○　選手村メインダイニングから離れた場所の別棟に、客席がオープンテラス式の「カジュアルダイニング」を設置。寛いだ雰囲気のなか、ブラジリアンバーベキュースタイルでブラジルの肉料理を中心に提供

○　地元で一般的な量り売り方式の食堂「キロレストラン」をメディアセンターに設置

○　大会スポンサーが権利を放棄した範囲等の中で地元の事業者が飲食物を提供

（例）・スポンサーがメディアセンターへの出店を辞退したため、国内企業が自らの看板を掲げハンバーガーショップを出店（なお、オリンピックパーク内でハンバーガー等を販売した事業者は、企業名を伏して出店）

・ブラジル特産のアサイー入りヨーグルトをロゴの一部をマスキングして販売（有名ブランドとみなされず、ロゴ全体のマスキングは不要とされた）

（３）その他

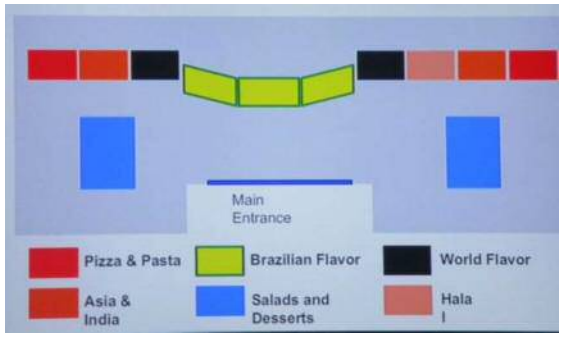
○　選手村で提供される料理は肉料理が中心で、魚料理は比較的少ない（サーモン、えびなど）。また、野菜・果物を除き、生の食材を用いた料理は提供されていない。

○　選手村においてピザ・パスタ料理コーナーに選手が集中し、30 分待ちなどの行列ができていた。

○　ハラルやコーシャーに対応した料理も提供

【国内企業のハンバーガーショップ】【オリンピックパーク内の軽食販売】【ｱｻｲｰﾖｰｸﾞﾙﾄ販売】

【選手村カジュアルダイニング】



【ブラジル料理コーナー（黄色）の表示】

【参考：ロンドン大会の状況】

○　イギリス料理の多様性や質を堪能してもらうこと、イギリスの地方料理をメニューに反映すること、中小企業の参加を確保することなどを方針とした。

○　調達に当たっては、農産物で英国産があるもの及び乳製品・牛肉・羊肉については、英国産かつ国内向け認証制度の認証を受けた食材、水産物は、国連食糧農業機関の規範に沿った食材（MSC 認証等を含む）の確保を義務付け

○　選手村メインダイニングにおいて提供するメニューを世界の地域で 4 つに区分し、うち一つを「ベスト・オブ・ブリテン」として様々な英国料理を提供

６ 標識・サイン

オリピック・パラリンピック競技大会開催時には、開催都市は国内外からアスリート・観客・プレス等多数の来訪者を受け入れることになるため、会場の場所を含む都市の情報を来場者に分かりやすく示す必要がある。

そのためには、標識・サインに英語及びピクトグラムを併記するとともに、外国人来訪者の需要や設置場所などを踏まえ必要に応じて選択した言語を記載し、多言語対応の取組を一層進める必要がある。

また、標識・サインは、方向や情報を示す機能に加え、ランドマークとしても使われることから、都市全体の一体的な雰囲気づくりという点で美的な要素も求められ、大会成功の鍵にもなる。

リオ大会における状況

（１）リオにおける標識・サイン

○　大会期間中、リオの組織委員会は大会用の仮設サイネージを約 25 万枚設置した。

○　大会サイネージは、緑に白字で統一され、方向・情報を示すだけでなく、ランドマークとして大会の雰囲気を作り出し、シティドレッシングやボランティアとともに大会を実感させる役割も果たしていた。

【ランドマーク型サイネージ】

○　公共交通機関や道路、大会施設等に設置されている既存の標識は、カバーせずに残して活用し、コスト面の節約を図っていた。なお、大会サイネージ、既存の標識ともに、種類（方向・位置・図面）・形式（つりさげ方・壁付け型・自立型）の面で、東京と同様に、多様なタイプのものがあった。

○　既存の標識等も踏まえ、大会サイネージのデザイン・製造・設置・メンテナンスの各段階を統合的に行うことが必要であり、このためにリオでは国際的な経験がある専門のコンサルタントを採用し、取り組んだ。

【既存の歩行者用道路標識】

○　駅の構内や BRT のターミナルなどには、各会場へ行き方を網羅的に案内する大会サイネージもあった。

【各競技場への行き方を説明する大会サイネージ】

（２）リオにおける多言語対応の状況

○　言語については、大会サイネージは、ポルトガル語と英語の二か国語表記だったが、式典や選手村など特定の場合は、一部これにフランス語も加え、三か国語を使用していた。駅や道路に設置されていた既存の標識等は、ポルトガル語と英語の二か国語表記を基本とし、優先席などを示すピクトグラムも活用されていた。

【駅の大会サイネージ（二か国語）】

【選手村の食堂（三か国語）】

【地下鉄駅の既存表示（二か国語）】

【参考：ロンドン大会の状況】
・ロンドンの大会サイネージは濃いピンクに白字で、読みやすく、大会の雰囲気づくりにも貢献
・言語については、大会施設は英語・フランス語の二か国語表記、それ以外の駅など公共交通機関や競技施設までの道路等は英語のみ

7　シティドレッシング

シティドレッシングとは、大会エンブレムやマスコット等を付したフラッグ・バナー等を競技会場やその周辺、主要道路等に設置することの他、オリンピック・パラリンピックシンボルを都市のランドマークへ掲出すること等により、大会の祝祭の雰囲気を演出し気運の盛り上げを図る取組である。

リオ大会における状況

（１）主要な道路へのバナー掲出等

○　BRT の最寄駅からオリンピックパーク等の会場までや、ライブサイト会場周辺、市内主要道路等の電柱にバナーを掲出。デザインは大会ルックやマスコット等。また、会場の周辺はルックデザインの横断幕により、大会開催の雰囲気が演出されていた。

【電柱に設置されたバナー】

【ルックデザイン（会場周辺）】

【横断歩道への装飾】
（ガレオン空港からリオ市内の道路など、市内の数か所で実施）

（２）大規模展示物（スペキュタキュラー）の設置

○　コパカバーナ海岸、マドゥレイラ公園等の地元住民が集まるスポットには、オリンピックリングやアギトスが設置された。リオでは地上に設置するものが中心であったが、フォトスポットになり地元住民が集まって記念撮影をしている様子が数多く見られた。

【コパカバーナ海岸のリング】

【オリンピックパーク内のアギトス】

（３）大会スポンサーによる広告掲出

○　ガレオン国際空港内や、市内主要道路の広告スペースを利用して、大会公式スポンサーの特徴的な広告が掲出されていた。

【SAMSUNG】

【BRIDGESTONE】

【参考：ロンドン大会の状況】

市全体を統一のルック（ピンク色）で装飾したほか、フラッグやバナー、マスコットの設置など多くの装飾を行い、地元住民や観戦者に対して十分に祝祭感を演出した。

・競技会場周辺やラストマイル、市内にはルックデザインやバナーや国旗による装飾を実施
・スペキュタキュラーを市内外に多く設置（例：タワーブリッジ、テムズ川、ヒースロー空港、セントパンクラス駅、カーディフのスタジアム等）
・その他、市内の観光ルートへ大会マスコットの設置や、園芸装飾（オリンピックリング）、橋のライトアップ等の多様な装飾を実施

８ ライブサイト

ライブサイトは、競技会場外で、大画面による迫力ある生中継、ステージイベント、競技体験等を楽しむことができる、オリンピック・パラリンピック競技大会公式事業である。

リオ大会における状況

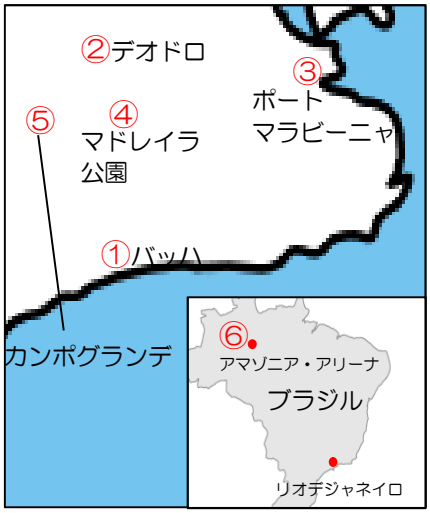
（１）実施状況

○　リオ大会では、ブラジル国内計 6 か所でライブサイトが実施され、実施主体・場所は次のとおり

・大会組織委員会：①バッハ・オリンピックパーク、②デオドロ・オリンピックパーク

・リオ市：③ポートマラビーニャ、④マドレイラ公園、⑤カンポグランデ・スポーツセンター

・マナウス州：⑥アマゾニア・アリーナ（サッカー競技会場）



○　オリンピック・パラリンピック期間中開催（④マドレイラ公園、⑥アマゾニア・アリーナはオリンピック期間中のみ）

○　①バッハ・オリンピックパークは 1 日平均 2～3 万人が来場。③ポートマラビーニャは 1 日平均 8～10 万人、休日など多い日は 20 万人の来場があった。

（２）参考となる取組

○　①バッハ・オリンピックパークと③ポートマラビーニャでは、大型ビジョンやステージ、競技体験に加え、公式パートナー出展ブース、飲食ブース、公式グッズ販売等が大規模に展開され、エリア全体の賑わいが創出されていた。

○　③ポートマラビーニャは、リオ市が再開発を行った地域であり、再開発の象徴的な場所（レガシー）として積極的な広報を行っていた。

また、ブラジルの文化や歴史を紹介するカーサブラジル（ブラジル館）が設置されていた。

海沿いの遊歩道には大型ビジョンや公式グッズ販売所、キッチンカーが複数個所設置されていたほか、聖火台が設けられ、多くの観客で賑わっていた。ボッチャや車椅子バスケットボールなどの競技体験も実施されていた。

【③ポートマラビーニャのライブサイト（ビジョン・ステージ周辺）】

【競技体験（ボッチャ）】

○　①バッハ・オリンピックパークでは、大型ビジョンが 2 面設置されていたほか、様々な公式パートナーによるブースが展開されていた。ステージではバンド演奏等が行われ、多くの観客で盛り上がっていた。

【①バッハ・オリンピックパークのライブサイト】

【公式パートナーによる出展】

【参考：ロンドン大会の状況】

ロンドン大会期間中､3つの階層に分かれたライブサイトが実施された。

・階層 1：LOCOG 主催の大会公式ライブサイトが実施され、オリンピックパーク内に設置された巨大画面に加え、国内 22 都市に設置された恒設画面を利用

・階層 2：大ロンドン庁を含む開催都市の地方自治体によってライブサイトが運営された。大ロンドン庁は、大会ローカルパートナーである BT（ブリティッシュテレコム）をパートナーとした「BT ロンドンライブ」をハイドパーク、ビクトリアパーク、トラファルガースクエアの 3 会場で無料イベントとして開催

・階層 3：LOCOG とは関係を持たない 37 の地方自治体による 50 のライブサイト

９　ハード面のバリアフリー

オリンピック・パラリンピック競技大会には、障害者や外国人等を含め、国内外から数多くの選手や観客等が参加する。障害のあるなしに関わらず、誰もが参加しやすい大会となるよう、大会におけるバリアフリーが必要不可欠である。

IPC は、組織委員会に対し、開催国・開催都市の特性等を勘案した上で、バリアフリー化の指針であるアクセシビリティ・ガイドラインを作成することを求めており、大会時はガイドラインを踏まえた運営を行う必要がある。

リオ大会における状況

※リオ大会のガイドラインを「リオガイド」、東京大会のガイドライン（今年度中に承認される予定）を「東京ガイド」と記載。

（１）競技会場等におけるバリアフリー（ガイドライン適用状況等）

○　移動経路は、スロープやエレベーターにより段差を解消していた。エレベーターのかごの寸法は、リオガイド・東京ガイドともに推奨基準「2,100×1,500㎜」と規定しているが、新設会場では推奨基準を満たしているエレベーターが多く見られた。

○　車いす席における視界の確保は、リオガイドでは「高さ 12mまでのボールが見えること」という規定があり、東京ガイドで標準基準としている、「前席の観客が立ち上がった際にも観覧が可能となるようなサイトラインを確保」している会場が多く見られた。

○　車いす席の配置は、リオガイドでは「建物の各区域に配置すること」、東京ガイドでは、「水平・垂直方向への分散が望ましい」と規定している。リオ大会では、水平方向へは分散されていたが、垂直方向への分散はあまり見られなかった。

【段差解消用スロープ】

【車いす席のサイトライン】

○　車いす同伴者席は、リオガイドでは「車いす席の同数以上」、東京ガイドでは「車いすと同比率で横に設置」と規定している。リオ大会では、車いす席の隣に同数以上の席が固定式または可動式で設置されていた。

○　車いす用トイレは、リオガイドでは「車いす転換スペースと手すりの設置」が規定されており、実際に設置されていたが、東京ガイドで規定されている「オストメイト用設備、ベビーチェア、大型ベッド等の設置」については規定がなく、そういった機能があるトイレは見られなかった。

【車いす席・同伴者席】

【車いす用トイレ】

（２）輸送におけるバリアフリー（ガイドライン適用状況等）

○　駅の視覚障害者転落防止対策は、リオガイドでは「コントラストのある色彩の触知警告表示（点状ブロック）を設置」と規定しており、実際に設置されていた。東京ガイドではブロック以外にホームドア、可動式ホーム柵等についても規定している。

○　電車内の車いすスペースは、リオガイド・東京ガイドともに「1 車両に最低 1 箇所、または 1 編成に最低 2 か所設置」と規定されており、リオ大会に向けて新設された地下鉄には、1 編成に 2 か所以上の車いすスペースが設置されていた。

○　選手等用バス発着場には車いすで乗降出来るよう仮設スロープが設置されていた。

【触知警告表示（点状ブロック）】

【電車内車いすスペース】

【選手等用バス発着場】

（３）その他の取組

○　スタッフ等に半日～1 日車いすで過ごしたり、目隠しをして食事をする等の体験プログラムを実施することにより、バリアフリー化の理解を促進した。

【参考：ロンドン大会の状況】

ロンドン大会もリオ大会と同様な整備がされていた。

・移動経路は、スロープやエレベーターにより段差を解消していた。
・車いす同伴者席は、車いす席の隣に固定式または可動式で設置されていた。
・車いす用トイレは、十分な広さを確保し、手すりが設置されていた。

【段差解消用スロープ・エレベーター】

【車いす席・同伴者席】

【車いす用トイレ】

１０　ソフト面のバリアフリー

大会の円滑な運営に向けては、観客等への的確な情報提供が重要であり、様々な障害特性に応じた情報媒体を活用し、健常者だけでなく、誰もが平等に、求める情報を入手できる環境整備が必須となる。

また、観客等のニーズにきめ細やかに対応していくためには、ハード面や情報面に加え、ボランティア等による人的サポートが必要であり、適時適切に提供していくことが大会成功への重要な鍵となる。

リオ大会における状況

（１）情報バリアフリー

○　大会開催における一般的な情報提供の事例

オリンピックパーク及び公共交通機関等においては、各競技会場への経路をわかりやすく案内サインで表示。また、会場では車いす等の優先入場レーンや、車いす席等の優先席をピクトグラムでわかりやすく表示。これらにより観客の自発的な移動を補助

【オリンピックパーク内の案内サイン】

【公共交通機関の案内サイン】

【観客席のピクトグラム】

○　障害のある方への情報提供の事例

視覚障害者：視覚障害者への情報提供については、触覚や聴覚を用いた方法が有効であるため、競技会場内における触知案内図の設置や競技解説用 FM ラジオ（英語・ポルトガル語に対応）の貸出等を行っていた。

聴覚障害者：聴覚障害者への情報提供については、視覚による方法が有効であるため、大型ビジョンによる文字情報の提供等を行っていた。

【競技会場内触知案内図】　【競技解説用 FM ラジオ】　【大型ビジョンによる文字情報の提供】

（２）人的サポートの提供

○　競技会場等における人的サポートの事例

約 5 万 6 千人の大会ボランティアを採用。障害者への理解促進や障害特性に応じた応対の仕方等について、e ラーニングや集合研修等により事前にトレーニングを実施。大会中は、案内・誘導や車いす使用者への補助、パーク内でのゴルフカートによる輸送サービス（オリ：21 台、パラ：27 台）等、様々な場面において、人的サポートによる観客サービスを提供し、ハード面・情報面のバリアフリーを補完

【ボランティアによる案内･誘導】　【車いす使用者への補助】　【オリンピックパーク内の輸送サービス】

【参考：ロンドン大会の状況】

・大会用案内サインは文字が大きく、色彩のコントラストも強かったため、リオ大会よりもわかりやすい配慮がされていた。

・大会ボランティアは、リオ大会より多い約 7 万人おり、案内や誘導、障害者へのサポート、パーク内のカートによる輸送サービスも行われていた。

１１　市民を巻き込む取組

市民を巻き込む取組（エンゲージメント）とは、より多くの人を大会に巻き込むことであり、大会への参加、協力を呼びかけ、大会の雰囲気を醸成し、大会後にレガシーを残していくために必要な取組

全ての会場を満席にし、選手が最高のパフォーマンスを発揮できるような舞台とするために欠かせない取組である。若者を大会に巻き込むためには、教育機関との連携も重要である。

リオ大会における状況

（１）リオ 2016 教育プログラム「トランスフォーマ」

○　リオでは、新しいスポーツへの挑戦や豊かな健康の獲得、オリンピック・パラリンピックの価値の共有等を目的とし、体育教員に対するオリンピック・パラリンピック競技の指導研修を通じた体育授業への導入促進、学校内における教育プログラムの普及・啓発に向けたリーダーとなる児童・生徒の育成、一般参加型のオリンピック・パラリンピック競技体験会等を実施

○　2013 年にリオ市の 15 校（2 万 5 千人の生徒）で開始。2014 年にリオ州、2015 年にサッカー会場がある州、2016 年にブラジル全州へと順次取組を拡大。最終的には、15,721 校（700 万人）で実施

○　TV 番組（トランスフォーマー・オンエアー）を 16 回放送し、スポーツ教育の重要性に関する普及啓発に取り組んだ。

（２）その他の市民を巻き込むプロジェクト

○　大会関係者による障害疑似体験

・ボランティア、事業者などのほか、大会開催時に治安維持を行う軍隊等に対して、目隠しをしたまま食事をしたり、一日車いすで過ごす等の障害疑似体験の機会を提供

○　様々なパートナーと連携したプログラム

・スポンサーの協力によるタクシードライバーへの英語トレーニングや政府の協力による地下鉄駅構内での卓球イベントの実施

○　ライセンシングによる取組

・16 種類の流通コインを使用した記念コインの開発（オリンピック・パラリンピックのマスコットなどもデザインとして活用）

・マスコットを活用したアニメプログラムの開発

オリンピック・パラリンピックのマスコットを併用し、32 のエピソードを用意

（３）大会期間中における競技体験イベント

○　ライブサイト会場では、オリンピック、パラリンピックの期間を通して競技体験イベントが行われ、また、オリンピック・パークでは、パラリンピック期間中にパラリンピック競技の体験イベントが実施されるなど、多くの参加者で賑わいを見せていた。

【競技体験イベント】

【教育プログラムで会場を訪れる学生】

【満員で熱気溢れる会場】

【参考：ロンドン大会の状況】
（教育プログラムについて）
・ロンドン大会では、若者がオリンピック・パラリンピックの価値や 2012 年大会について学習する機会を支援することを目的に、教育プログラム「ゲット・セット」を実施
・学校や地方自治体の教育支援担当者などを対象に、オリンピック関連の各種教材や指導のアイデアを専用ウェブサイト上で無料で提供
・参加校に対し、オリンピック・パークツアーへの参加、オリンピック・パラリンピック選手の学校訪問、2012 年大会の観戦チケット配布など、様々な特典を用意

１２　大会を支える都市運営

オリンピック・パラリンピック競技大会開催時には、開催都市は国内外から多数の来訪者を受け入れることになるが、その場合でも、通常の都市機能を維持しつつ、円滑な大会運営を支えていかなければならない。

IOC からは、組織委員会が設置するメインオペレーションセンター（MOC）と効果的に連携し、競技会場外の活動に係る調整を行う都市オペレーションセンターの設置が求められている。

また、都市活動と大会運営が重なる競技会場周辺においては、競技会場内の大会運営も考慮しつつ、輸送機関や警察、消防等の関係機関と連携し、観客及び住民に対して安全で快適な環境を提供しなければならない。

リオ大会における状況

（１）都市オペレーションセンター

○　リオ市では、2010 年の大洪水災害をきっかけに、都市に関する情報（道路交通、電気、ガス、水道、大気汚染等）を一元的に集約したオペレーションセンターを設置

○　大会時は、このオペレーションセンターを活用して、輸送を中心に円滑な大会運営を支援

【メインルーム】

【大会期間中の取組】

○　モニタリング体制の強化

・メインルーム内に、各競技会場（バッハ地区、コパカバーナ地区、デオドロ地区、マラカナン地区）、ライブサイト会場等の交通状況、観客動向等をモニタリングするチームを設置

・輸送オペレーションチームを設置し、BRT、電車、メトロ等の交通情報をモニタリング

・都市オペレーションセンター内に、国、州政府、リオ市の合同で、医療体制監視センターを設置
市内各病院の病床の空き状況を把握するとともに、競技会場、ホテル、ライブサイト会場、港、空港等をモニタリングし、感染症の発生状況等を監視

【輸送オペレーションチーム】

○　組織委員会との連携

メインオペレーションセンターにリエゾンオフィサーを配置（1 名）するとともに、1 日 2 回電話会議を実施するなど、組織委員会と緊密に連携

（２）競技会場周辺での取組（ライブサイト会場含む）

○　リオ市が主導し、主に以下の取組を実施

⇒　路上競技会場等における道路交通規制、パイプ柵の設置による歩行者の安全確保、シティ・ホストの配置、観光案内所の設置（100 か所以上）、給水所の設置、路上や浜辺等の清掃、仮設トイレの設置等

【歩道と車道を分離したパイプ柵】

【給水所】

【トライアスロン会場周辺の清掃】

【仮設トイレ】

【参考：ロンドン大会の状況】
（都市オペレーションセンターについて）
・ロンドン大会では、ロンドン交通局（地下鉄、バス運営、道路管理、一部の交通警察権限等）内に、ロンドン調整センターを設置
・地下鉄事業者、バス事業者、道路管理者、消防、警察、組織委員会の代表者が集まり、情報共有及び各組織への情報提供を実施
・信号や道路ネットワーク等に関する調整を行う場として、ロンドン調整センターとは別に、輸送調整センターが設置されていた。